

# 熊谷を拓いた 村岡五郎良文

熊谷市郷土文化会 会長 来間平八

熊谷が誇る武将と言えは熊谷次郎直実が最も有名であるが、それより以前、熊谷の地に居住し、ここを広く開拓して「坂東八平氏」の祖となった武将に、村岡五郎良文がいる。坂東八平氏とは、千葉氏、上総氏、三浦氏、土肥氏、秩父氏、大庭氏、梶原氏、長尾氏のこと、関東一円に分布して国司などの官職を占めて勢力を張った平氏一族であるが、その祖が村岡五郎良文なのである。従って、熊谷の礎を築いたともいえる武将・良文を取り上げて、熊谷の歴史を考えるよすがとしたい。

## 1. 良文の生い立ち

良文は、桓武天皇の曾孫・高望王の五男として、仁和二年（886）に京都で生まれた。生母が熱心な妙見菩薩の信者で、その姿を夢に見て良文を懐胎した、と伝えられている。（後に、良文は秩父地方を開拓して、秩父神社＝妙見さまをを造営している。）

そのころ、父の高望王は朝廷から「平」の姓を与えられて上総介任じられ、寛平二年（890）に関東に下ったが、当時四歳だった良文は母と共に京に残り、ここで成長したようである。

## 2. 下総国府村岡郷の時代

関東に下った高望王は、みずから開拓した荘園を子らに分け与えたが、一五歳ほどだった良文にも、下総国村岡郷（茨城県千代川村）が分与された。そこで良文はここに移り住み、村岡五郎を名乗るようになった。しかし若年だったため、兄の良持が後見役として近くに住み、領地の管理をしてくれたようである。

しかし、その兄・良持が早く亡くなってしまったため、良文の周囲に変化が起こる。良持の遺領をめぐる一族間に争いが生じたのである。良持の兄弟が相談して、良文の反対を無視し、土地の管理を自分たちでやろうとしたことに遺児の将門が反発し、やがて将門の乱という大乱になって、関東は戦乱の地になってしまったのである。こうした骨肉の争いに嫌気がさした良文は、やがて下総の地を離れ、武蔵国の村岡郷（熊谷市）に移り住むことになった。

## 3. 武蔵国村岡郷の時代

熊谷の村岡郷に移った良文は、一族の争いから身を離し、自身の荘園経営に力を注いだ。とくに秩父地方の開発に尽力したようである。

天慶二年（939）四月、出羽国で俘囚の乱が起こった。その鎮撫のため、良文

は陸奥守、鎮守府将軍に任じられ、この乱を鎮めている。ただ、この遠征については、様々な憶測がなされている。世話になった良持の遺児である将門に同情的であった良文のことを考え、将門に同調しないよう、朝廷が分離を図ったのではないかとされている。

良文のことで、『今昔物語』に面白い話が載っている。

そのころ、村岡郷にほど近い箕田郷（鴻巣市）に源充（宛）という武将がいた。その家来と良文の家来との中傷合戦がもとで、両者が戦うことになる。つまり、良文の家来が「良文さまの腕力は充さまの力に大きく劣ると彼の家来どもが言い広めております。」と訴えると、充の家来も同じことを主君に訴えた。この互いの家来の中傷がエスカレートして、ついにその腕力を競い合う羽目になった。

そして各 500 程の軍勢を率いて対陣した。世に言う「村岡河原の合戦」である。場所は現在の熊谷南小学校の南の堤外あたりという。そのとき両将は「己の腕力を競うのに兵を交えることはあるまい」と、一騎打ちすることに合意した。そして河原にあった大きな榎の木を挟んで互いに矢を射かけたが勝負はつかなかった。そこで互いの腕力が互角であると認め合って、和解して兵を引き上げたという。（榎町の町名は、この故事により付けられたという。）

#### 4 相模国村岡郷の時代

良文には二人の子がいた。長子の忠光は早く亡くなり、その子・忠通は、大伯父・相模介良房の領地を相続した。しかし忠通は幼少だったので、孫の身を案じた良文は、新しい館のある相模国鎌倉郡村岡郷（神奈川県藤沢市）までついて行き、ここに定住した。そして 16 年後の天暦六年（952）、六六歳でこの世を去った。

藤沢市村岡の二伝寺の裏山には、良文塚、忠光塚、忠通塚という三つの塚があり、鎌倉時代に建てられたとみられる石塔が現存する。子孫である鎌倉氏か三浦氏が後に建立したものと思われる。もし墓ならば、熊谷を拓いた英雄はここに眠っていることになる。

（熊谷市公連だより 第 11 号 平成 23 年より）